
I take a gander at ...

佐野 羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I t a k e a g a n d e r a t . . .

【Nコード】

N 3 3 6 5 0

【作者名】

佐野 羊

【あらすじ】

些細なきっかけで好きになったのは、隠れファン推定100人超の、宮瀬くん。少しでも近づきたくて、話してみたくて、人見知りな平凡で自己嫌悪の塊みたいな女の子がおるおる頑張る話。おとなしくて清楚で控えめな女の子が、実は気になる男の子の話。

吊り革をにぎれば（前書き）

そうだ。私なんか釣り合うはずがない。

目の端に彼の姿をとらえるたびに思うこと。

それでも、もしももう一度、彼が私に話しかけてきてくれたのなら、

息がとまるくらい 幸せ

吊り革をにぎれば

多くの人が知ってるだろう。

電車やバスの吊革につかまりながら携帯を見るとき、多くの人は左手で吊革をつかむということ。

私以外の誰かだって、きっと知ってるだろう。

私が右で、彼が左 携帯電話off車両のとき

右利きの私と左利きのあの人が並んで吊革をつかめば、お互いの肩がほんの少し触れるということ。

3

私以外に、誰か知っているだろうか。

私が左で、彼が右

左利きのあの人が携帯を見て、私がさりげなく左手で吊革をつかめば、

他の乗客を吊革に伸びた腕で遮断して、二人の空間が作れるという

始まりは社会プリント1 (前書き)

空気の読める桜なんて、いない。

始まりは社会プリント1

他の中学からダサイダサイといわれる冬服、深緑のセーラー服に袖を通して早2年目の春。

1か月前に、晴れて私は中学2年になった。

入学式には、中庭の桜が満開に花開いて、何かロマンチックなことが起こりそうな予感がして・・・
なんていう少女マンガのようなことは全くない。

そもそも思うことは、本当に入学式に桜が咲くのかということ。
桜前線が何を思っているのかわからないけれど、私は入学式とか始業式に、桜が綺麗にさいているのを見た試しがない。

桜の開花のタイミングが悪いのは寒かったからだとか、暑かったからだとか、いろんなことを気象予報士が言い訳するたびに、入学式に桜満開に恋、なんていうお約束的な展開は少女マンガの中だけだという確信を深めた。

そう、今年も見事にタイミングを外した桜がいつのまにか葉桜になりかけた5月の初め、
つまり今。

2年になって初めての中間テストだって言うのに、私は風邪をひい

た。

始まりは社会プリント2 (前書き)

宮瀬君は、陸上部だった。

始まりは社会プリント2

『風邪大丈夫？数プリと理科プリントもらったよ 心配しないでゆ
つくり休むんだよ〜！紗枝さえ』

『紗枝とかぶった！！もちづきの分のプリント、あたしもとっちゃ
ったよ（笑）無理しちゃだめだよー^^望のぞみ』

昨日の夜に送ってくれたらしいメールを、通学するためのバスに乗
りながら確認した。

昨日の昼過ぎから寒気と頭痛がひどくなり、あまり意識もないまま
早退した私を心配してメールくれた二人は、私の中学で唯一の友
達。

昨日はあんなにひどかったのに、一晩ぐっすり寝たらもう元気にな
った。

それで昨日の5限と6限の授業がどっちも中間テストがある科目だ
ったから、昨日の分も勉強しようとして少し焦って今朝は早めに学校へ
向かった。

「佐倉さん」
「え」

今なにか自分の名前が聞こえた気がして、ふと顔を上げるといつの間にかとつくに学校に着いていた。

さっきまでバスに乗っていたのに、メールの返信を考えながら歩いていたら、もう靴箱の前。

ローファーから上履きに履き替えたときに、後ろで声がした。

あ、私の名前。

「佐倉さん、おはよ。風邪もう大丈夫？」

「あ。お、おはよう。もう、元気になったよ」

ものすごく反応するのが遅くなってしまつて、急いで靴箱をぱたんとして振り返ると、宮瀬君の姿があつた。びっくりした。

朝早いから、私以外の人はまだ朝練の人以外来てないだろうと思つていたから、すごくびっくりした。

「そっか。昨日顔真っ青になつてたからどうかなと思つて。あ、俺朝練しようと思つて早く来たんだけど、そしたら部室の鍵無くて諦めてこつち来たんだ。」

同じクラスで陸上部の宮瀬君。え、あれ、部室に入らなかつたって朝練できるんじゃないのかな。

「うん」

そんなこと言えるわけもなく、うまく言葉を話せなくなつて、頷くだけで、黙つた。

でも宮瀬君は気にした風もなくさつと上履きに履き替えると、クラスが同じだからなのか気まぐれなのか、私を追い越した後、早く来なよつていつてるみたいに振り返つた。だからあわてて追いかけて、同じ廊下を同じペースで歩いた。

ぱた、ぱた、ぱた、
すた、すた、すた、

男の子と廊下並んで歩くの、初めて、だ、私。

私より頭が一つ半くらい背の高い宮瀬君は、コンパスに物言わせることもなく、ゆっくり綺麗に歩いている。

並んでるっていつても、宮瀬君の上履きのかかと、踏まないできちんと履くんだなって思いながら歩いていたくらいだから、多分斜め後ろをくっついて歩いただけなんだろうけど。

宮瀬君の、かかとの、小学生だったら名前を書くところがピンと立ってて、綺麗だなって思った。

始まりは社会プリント3

他の学校がどうかはわからないけれど、私の学校の教室は、放課後に必ず施錠する決まりがある。

つまり朝一番に来た人がドアを開けようとしても、ドアは開いていないわけで。

一番に来たことのなかった私と、宮瀬君はそのことをすっかりわすれていて、ドアを開けようとしたのに、がたつて音をならしただけで、教室に入れないままだった。

「あー。そっか朝イチは閉まってるのか。俺、職員室から鍵、とつてくるから、佐倉さんはカバン見てて」

「わ、わかった」

そういうと5分もしないうちに2・3て書かれた札と一緒に鍵を持って戻ってきて、かちゃりと気持ちよい音と一緒に扉が開いた。

「カバンありがとう」

「あ、鍵、ありがとう」

お互いにお礼を言いあって、私はなんとなく顔を合わせられなくて、そのまま自分の席に向かった。

教室の一番奥の窓際の席。一番後ろ。

窓が開いていなくても隙間風が寒いところで、でも日当たりが良く、私は気にいっている。

だって一番後ろの席だから授業中は先生以外の誰にも私の姿を見られなくて済むから。

音をたてないように椅子を引いて机とカバンの中身を引き出しに入

れ終わると、そつと宮瀬君の席の方を見た。

宮瀬君は、わ、私の方をじっと見てた。

教科書もしまったし、何もすることがなくて手持無沙汰で、でも宮瀬君はどうしてか私をじっと見てきて焦った。急いで視線を前の座席に逸らした。

何か喋らなきゃ、だめ、かな。なんでじっとみてくるんだろう。え、あ、う。

頭の中で百面相しているのに、きつと私の顔はひきつったまま前の席を睨んでるようにしか見えないと思う。

ピピピ　ピピピ　ピピピ

ピピピ　ピピピ　ピピピ

宮瀬君の視線が、やっと私から外れた。

目覚まし時計のような音の正体は、宮瀬くんの携帯の着信音だった。

「はい、宮瀬」

ポケットから綺麗なメタリックブラックの携帯を取り出すと、落ちて着いていて、きれいで、男の人だと分かる低くて心地よい声を教室に響かせた。

その声を聞きながら、携帯なのに宮瀬くんはわざわざ自分の名前を名乗ってる、いまだき珍しいな、なんて思って少し口角が上がった。

「綾瀬、俺朝練サボったわけじゃないよ。じゃなくてちよつと・・・」

「

ちらつと私を見たような気がしたと思ったら、話しながら教室を出て行って、そこで私と宮瀬君の二人の時間が終わった。

よくわからないけれど、胸のつかえが下りたみたいに、ほっとした。

始まりは社会プリント4 (前書き)

胸のつかえは降りたけれど。

始まりは社会プリント4

「もちづき、風邪治って良かったね」

「あ、うん。あ、あの、メールありがとう。返信返しそびれちゃって、その、ごめんね。」

「や、もちづきのことだから。返信に悩んで未送信メールで送信ボツクスいっぱいなんだろうなって、見当付くよ」

くすつと笑って望ちゃんはブドウパンにかじりついた。

昼休み、いつものように望ちゃんと紗枝ちゃんと給食を食べる。

私の学校は、中学までは給食と決まっている、ちよつと変わった学校。

ちなみに今日は私の苦手なレーズンパンの日。嫌だな。望ちゃんは好きなのかな。

「ねーね、いつも思ってたんだけどさ。望はさ、なんで佐倉のことモチヅキって呼ぶの？モチヅキって、あだ名なの？」

ちよつとだけ不思議そうな顔をして、紗枝ちゃんがスープをスプーンでくるくるかき回しながら私を見た。ん、お行儀悪い。

紗枝ちゃんは今年に入って仲良くなった子で、望ちゃんは中1からの友達。

「あ。あのね、望月はお父さんの姓で、それで今はお母さんの実家の姓で。だから、佐倉なの。」

「ふーん、そーなんだー。」
全然要領をえてない答えなのに、紗枝ちゃんはそれ以上質問してこなかった。

そついうのも、紗枝ちゃんの優しさなんだろうな。

「それはそうとき、昨日の授業の分、プリントできた？分からないところあったら私のプリントみていいからね！」

がさごそ、なんでも入っていきそうな大きなカバンの中に手を入れてちよつとよれつてなったプリントをずいっと私に押しつけるように渡したのは、紗枝ちゃん。地毛なのに、色素の関係で少し茶色い髪の毛、こげ茶の目。まつ毛もちよつと茶色い紗枝ちゃんは、とつてもかわいい。やわらかそうな髪の毛が、首を振るたびふわふわ揺れる。

「あ、ありがとう。」

のぞみちゃんからも空欄の埋まっている理科プリントを渡してもらつて、お礼をいった。

がやがやとせわしない教室で私の声が二人に届いているのか、いつも少し心配になる。

給食時間は無法地帯だ。

先生は職員室で昼食とるし、昼休みの間なら、いつ食べ始めても、いつ食べ終わつてもいい。

自由なんだか、放置してるだけなんだかよくわからないけど、給食時間が一番うるさい。

手渡された4枚の理科プリントと数プリは、どのページも一生懸命綺麗に書いたと思われる文字と数字で埋まっていた。

「数学はねー、途中式も書いておいたから、数学苦手な佐倉でも分かると思つんだー！」

「あ、ほんとだ。わかりやすい。」

「理科もね、テストに出そうなところはマーカーひいてるから、も

ちづきもそうしておくといいよ」「

「紗枝ちゃん、望ちゃん、ありがとう」

二人で分担して私のために一教科ずつ丁寧に解説を書きこみながらプリントの空欄を埋めてくれたらしい。いつもは走り書きで一色しか使わないはずなのに。

「明日から中間テストだから、放課後までに返せるようにするね」

「ゆっくりでいいーからね」

「数学は最終日なんだから、きょうじゃなくてもいいよ」

「うん、ありがとう。明日のテスト、理・国・社だったよね。」

「そーだよー」

昼休みに入って、紗枝ちゃんと望ちゃんとやっといっぱい話ができで、朝宮瀬君と会ったことなんて、もう忘却の彼方だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3365o/>

I take a gander at ...

2010年10月19日11時05分発行